

# 子牛感染症対策事例について

子牛感染症の高被害農場において十勝NOSAIが実施する子牛感染症対策（一般損害防止事業）を平成23～25年度にかけ実践した結果、事故率が大きく低下しましたので、その概要について報告いたします。

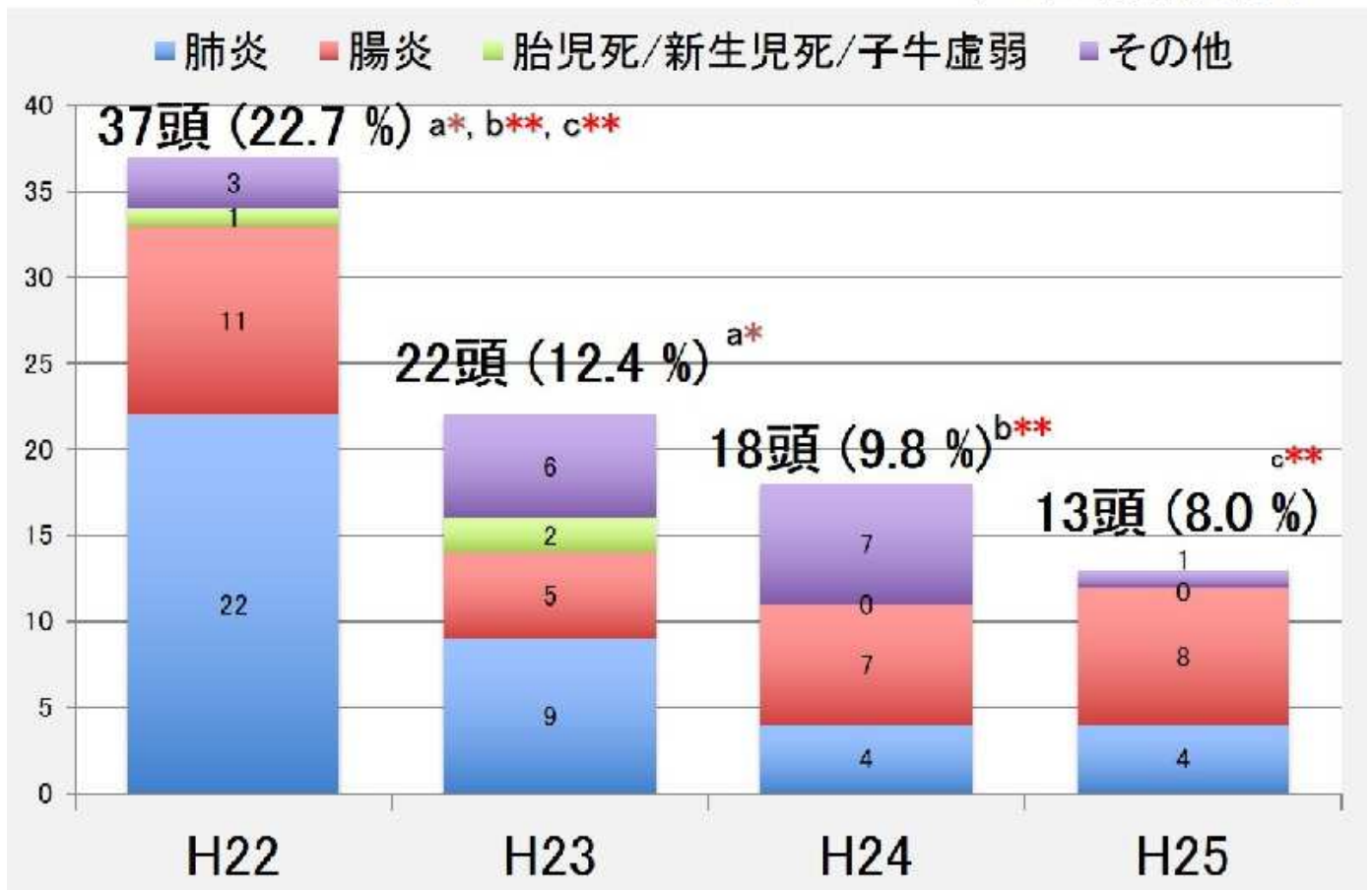
## 農場の飼養状況と疾病予防について

畑作兼業で繁殖和牛60頭、子牛等80頭を飼養し、疾病予防として畜舎消毒やワクチン接種等を実施していました。

## 年度別の死廃・病傷発生状況について

平成22年度における子牛の病傷頭数（グラフ-1）は肺炎や腸炎を主体に37頭で頭数被害率22.7%、死廃頭数（グラフ-2）も肺炎や腸炎に加え胎児死で26頭、頭数被害率16%といずれも事故多発状況にありました。また、異動状況（グラフ-3）については、1月～3月の冬期間に出生と導入が多く蜜飼状況にありました。

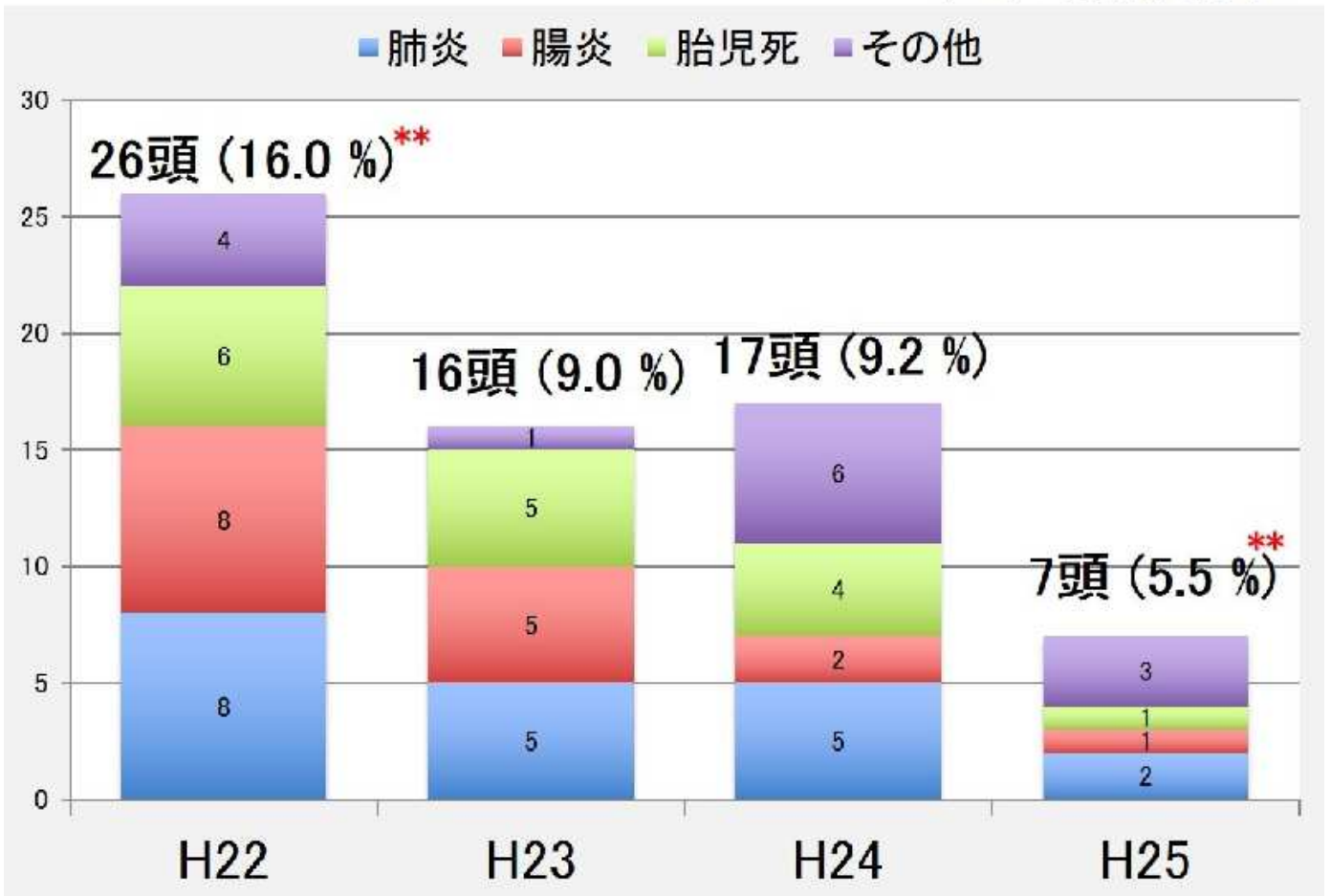
( %): 頭数被害率



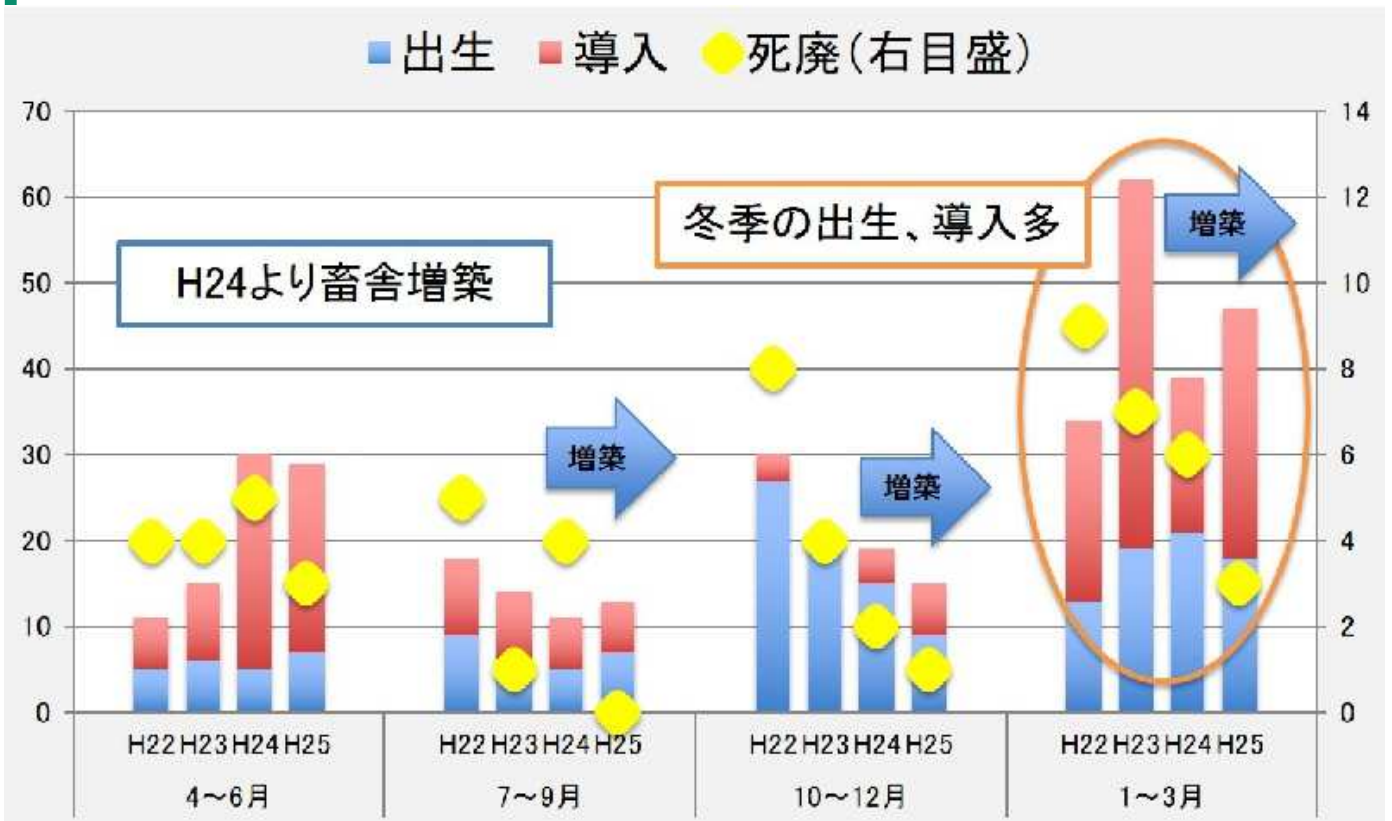
グラフ1 年度別病傷頭数

## 対策と結果について

(%):頭数被害率



グラフ2 年度別死廃頭数



グラフ3 異動状況

病因検索の結果に基づく治療と感染症予防プログラム（図-1）の見直し、あわせて計画的な導入と人工授精の実施、また平成24年度には子牛等の畜舎を増築した結果、病傷・死廃事故ともに減少傾向で推移し平成25年

度における病傷の頭数被害率は8%、さらに死廃においては頭数被害率が5.5%までに減少しました。

- 分娩前の親牛全頭に下痢5種混合ワクチンを接種
- 生後1ヶ月前後でバイコックス経口投与
- 生後1～2ヶ月齢で全頭にリスポバルワクチン接種
- 生後3ヶ月齢以降で全頭に5種混合生ワクチン接種

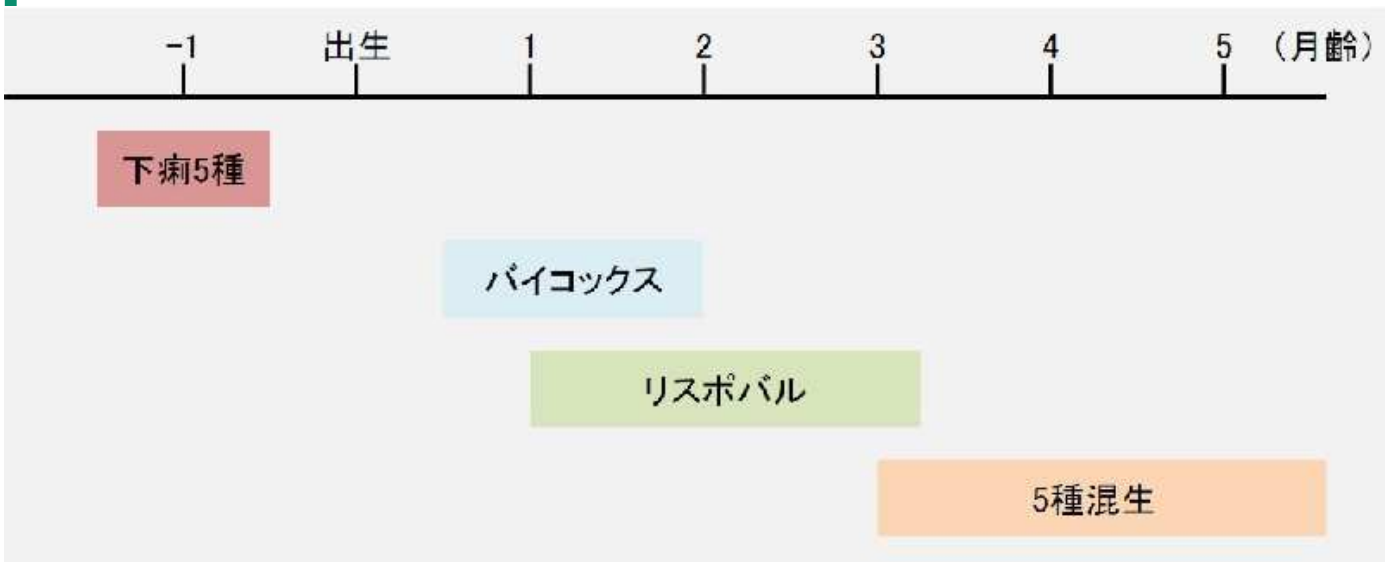


図1 感染症予防プログラム

## 農場の取組みについて

下記に示したとおり、主にワクチンプログラムの継続、計画的な人工授精と更新、周産期および出生子牛の管理を強化することで事故は減少し、今後も、この農場における事故低減に向けた取組みに期待しています。

- 感染症予防プログラム  
ワクチン（下痢5種、リスポバル、5種生）接種  
バイコックス投与
- 授精回数（出生数）のコントロール、定期的な導入計画
- 定期的な牛群更新
- 十分な分娩監視、冬季出生牛の保温
  - 出生後十分な初乳給与（初乳製剤は補助的に使用）
  - 冬季の分娩コントロール
  - 母牛の飼養管理、特に分娩1ヶ月前からの栄養管理の充実
  - 虚弱子牛の予防
- 異常牛の早期発見、早期往診依頼
- 定期的な牛舎消毒